

『書評』

井上文則著 国書刊行会

『天を相手にする——評伝 宮崎市定』

(東京大学) 吉澤 誠一郎

宮崎市定は、東洋史学の分野では誰一人知らぬ者はない大学者である。本書はこの宮崎市定の本格的な評伝であり、私見では評伝としてほぼ決定版の域に達していると思われる。

著者の井上文則氏は、東洋史学者ではなく気鋭の古代ローマ史家であり、その点で、本書が刊行されたとき私は驚いた。井上氏は、本書の冒頭で、宮崎が岩波新書の『雍正帝』を書いた動機として「書いて見たくてたまらなかったからである」と述べているのをひき、「筆者が宮崎の評伝を書いたのも、まさに書いて見たくてたまらなかったからである。書いて見たくてたまらなくなるのは、やはりその人物に無限の魅力を感じるからであろう。宮崎にとっては雍正帝がそうであり、筆者にとっては宮崎がそうであった」(1頁)と述べている。

井上氏は「はしがき」において、宮崎の研究の魅力について紹介し、①その研究に広がりがあり、とくに世界史的な視野を有していること、②非常に独創的であること、③地に足のついた実感的な歴史研究であること、④文章が優れていること、⑤剛毅な文章から繰り出される歯に衣きせぬ物言いを挙げている(3~10頁)。評者もこれらの宮崎評価をほぼ共有するものであるが、それにしても、「はしがき」を読んで、井上氏の入れ込み方がたいそうなものであることに改めて一驚した。

本書の性格からして、この場で内容の要約をするのはあまり意味がないと思うので、目次を掲げることで本書の紹介としておきたい。

第一章 千曲川の畔——飯山時代(明治34年~大正8年)

- 第二章 山出しの青年——旧制松本高等学校時代(大正8年~大正11年)
- 第三章 優れた師の下で——京都帝国大学文学部での学生時代(大正11年~大正14年)
- 第四章 ごく上々な門出——大学院から旧制高校の教授(大正14年~昭和9年)
- 第五章 鼻息の荒い時代——京都帝大の助教授、フランス留学(昭和9年~昭和13年)
- 第六章 国策に従事して——京都帝大の助教授から教授へ(昭和13年~昭和20年)
- 第七章 地味な宮崎——京大教授時代(昭和20年~昭和40年)
- 第八章 江湖の読者に迎えられて——停年後の宮崎(昭和40年~平成7年)

本書の価値をまず挙げるとすれば、行き届いた調査に基づき、宮崎の一生を詳細に描き切った点にあるだろう。冒頭で決定版と評したゆえんである。丁寧な注記が、本書に堅実な基礎を与えていく。当然ながら、私が知らなかった多くのことを本書から教えられた。

そのなかで私の個人的な印象に残ったのは、宮崎の出身地であった信州飯山の風景描写である(著者撮影の写真も載せられている)。実は私は宮崎の出身地が飯山だということは何となく知っていたが、その位置などについて曖昧な認識しかなかった。しかし、本書を読んで改めて飯山を地図で調べてみると、私の郷里である上州沼田とそれほど遠い場所ではないことに気づいた。もちろん、群馬県と長野県の間は峻険な山岳地帯が広がり、この二つの都市どうしには直接的な連絡はほぼ無いといってよい。しかし山間部から川が流れだす風光や寺の多い片田舎の小都市の様子はよく似ているように思われ、宮崎への親しみを感じた。

さて、本題に戻ると、私がこの評伝を読んで勉強になったと感じたのは、宮崎の業績をほぼ年代

を追って挙げ、その時点での宮崎の関心の所在を説明している点である。私を含め、後の時代の者は、宮崎の著作をひととくとき、その刊行の順番に読んでいくはずはない。『宮崎市定全集』にしても、おおむね内容の近い論考をまとめた編集方針であるから、宮崎の関心の変遷を追っていくには便利でない。また宮崎の研究対象が多岐にわたるために、ついつい宮崎の業績の全体像について時期をおって理解することを怠りがちとなりやすい。そこで、本書を一読することで、その弊をある程度免れることができたよう感じた。

この評伝は、宮崎の全体像を描き出そうとする真摯な態度で書かれている。それゆえ、ときに厳しい指摘が含まれることもある。「宮崎の独創は、時に珍説に近くなる。そこがまた宮崎の魅力でもあるが（後略）」（6頁）と指摘したうえで、宮崎が青銅器の銘文を疑い、西周の存在を否定していた例を挙げている。また、戦時中は時流に即した文章を書いていたことも第六章で詳しく論じている。宮崎を称賛することを目的とせず、宮崎の人物像を客観的に把握しようとする井上氏の歴史家としての緊張感を私は本書から見て取った。

本書は、宮崎が自身を語った文章に多く依拠している。「自身を積極的に語るその姿勢も宮崎の作品の魅力の一つとなっていることは間違いない」（434頁）。他方で、一般的にいえば、人は自分に都合よく自己認識したうえでそれを書き残すものである。井上氏は、宮崎の人生の背景にある歴史的状況について詳しく調べ上げることで、広い文脈のなかに宮崎の一生を位置づけようとしている。この点も評伝としての価値を高めている。

最後に、本書の題名について考えてみたい。井上氏は「戦後の一時期、宮崎は必ずしも正当に評価されていなかった。この状況に憤っていた宮崎が自らに言い聞かせていた」言葉が「天を相手にする」だったという（433頁）。井上氏は、この格言の典拠として『史記』伍子胥列伝を挙げている

が、それで十分だろうか。宮崎の記した原文には、「古語に言う、人盛んなる時は天に勝つ。天定りて人に勝つ、と。そういう天を相手にすることだ」（宮崎市定『アジア史研究』第三、同朋舎、1957年、はしがき6頁）とある。

このうち、「人盛んなるときは天に勝つ。天定りて人に勝つ」は、確かに『史記』伍子胥列伝に似た文言がある。それは伍子胥が激しい復讐心に駆られて尻に鞭打つ所業にはしたとき、対立陣営の者がそれを非難する発言である。伍子胥の悲劇的な最期を予言したという意味で、伍子胥列伝の中でも印象的な場面といえる。しかし、この原意を踏まえれば、宮崎が「人の評判というものを全然意に介しない程の修養はまだ十分には出来ていない」（同前、はしがき5～6頁）がゆえに自分に言い聞かせる格言としては、ぴったりしない印象もある。また、「天を相手にする」という肝心の言葉は伍子胥列伝に見えないようである。

私は、「天を相手にする」の典拠としては、おそらく西郷隆盛の語録を挙げるほうが適當だと思う。『西郷南洲遺訓』には「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを尽て人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし」（岩波文庫版13頁）とある。これは、宮崎が理想とする境地とよく合致すると感じるからである。

しかし、「天を相手にする」が宮崎の心境そのものだったとは、私は考えていない。「そういうものに私もなりたい」という趣旨であろう。「修養はまだ十分には出来ていない」からである。こう考えてみて、学者らしいメンタリティーの吐露に、私は改めて宮崎への親しみを感じた。

以上、やや偏った紹介となってしまったかもしれない。中国古代史研究者の視点からは佐藤信弥氏が既に書評をあらわしているので（『東方』456号、2019年2月），ぜひ参照されたい。

（2018年7月刊、437ページ、本体3,600円+税）